

# 『セールスマンの死』と 『走れ、うさぎ』にみる「家」

丸 田 明 生

(1)

E. フロムは『悪について』というエッセイの中で次のように述べている。

幼児の生活は母親に全く依存する。それ故、彼女は生を与えることも、生を奪うこともできる。母なるものは生を与える人でもあれば同時に生の破壊者ともなりうる。愛される者でも恐れられるものでもありうる。一方父親の役割はそれとは異なっている。彼は人為的な法と秩序、社会的ルールや義務を代行し、罪や報酬を与える人である。彼の愛は条件付きで、要求されたことをなすことにより獲得できるものである。その理由により父親と結びつく人は、父親の意志通りに行えば容易にその愛を獲得できるが、しかし完全かつ無条件な愛につきものの陶酔的感情や、確実性や保護は、父親結合の人間の経験ではほとんど得られない。<sup>1)</sup>

この父と子の関係は、旧約聖書の昔から、近くは『エデンの東』においても、しばしば語られたテーマである。フロムのこの言葉は『セールスマンの死』について考える場合、その批評の一つの尺度となるであろう。

ミラーは『セールスマンの死』において、父と子の関係を縦糸とし、社会的関係を横糸としてこの劇を構成していることは明らかである。ミラー

は、「人の中に社会があり、社会の中に人がいる」といって、個人、家族、社会、のいづれをも絶対化せず、それらを相関的にダイナミックにとらえる劇を作りあげたことは、彼の他の作品の殆んどについても言えることであって、それは現在の如く複雑化し、多様化した社会環境の中で生きていかねばならない人間にとって、父と子の関係もそれら社会的要因を無視して考えることは不可能であることはいふことである。そしてそのことが又父と子の悲劇的要素を増大することになるのは避けられないことである。

ウイリー・ローマンが25年の長期分割で建てた二階建の木造家屋の背後には、今彼の家を押しつぶそうとでもするかのように高層アパートが連なり、一日中日光を遮っている。25年前、ウイリー一家が越してきた当時は榆や楓が家の廻りに茂り、ウイリーがピフやハッピー達のためにハンモックを吊してやったそれらは今はない。ウイリーは追憶に耽りながら、「アパートを規制する法律をつくるべきだった」とか、「木を切り倒した建築業者を逮捕すべきだった」と口走るが、それは巨大なアパート群にむかう犬の遠吠え程の効果も生じてはいない。

時の変革は、ウイリーが注意力が散漫となり車の運転が危険になったため、妻のリンダの勧めもあってニューイングランド方面への出張セールスから、ニューヨーク勤務に代えて貰いたいと、36年間勤めてきたワグナー商会の二代目社長ハワードを訪れる場面にもあざやかに描かれている。ハワードはウイリーの要望を聞くともなく聞かずともなく、新製品のテープレコーダーをかけてみせる。ウイリーが先代社長の思い出話をし、彼が長年ワグナー商会のために働いてきたことをほめかしながら、ニューヨーク勤務への配置換えを訴えている時、突如としてその機械は鳴り始める。ウイリーは狼狽し驚愕する。時代は道具ばかりか人情をも変えている。ウイリーが訴ねてきたことを幸いに彼に解雇を言い渡すハワードは、新しいタイプの経営者を象徴している。このような合理主義人間ともいえるタイプはもう一人登場する。息子のピフが融資を頼みに行くオリバーである。オリバーはピフを6時間も待たせた揚句、彼を覚えていないばかりか思い

出そうともしない。ピフは自分が軽くあしらわれた腹いせにオリバーの机の上にあった万年筆を盗んでしまう。嘗てオリバーの店に勤めたことがあり、しかもそこで盗みをした前歴のあるピフに大金の都合をしてくれることを期待することも又親ゆづりの時代錯誤ともいえるであろう。

(2)

ピフの盗みの行為はその源を彼の幼少の時代に読者の目を向けさせることになり、それと同時にこの劇の縦糸をたどらせることになる。そしてそれは又遠くウイリーの世界観にまで我々を逆らせる。

この舞台の幕はフルートの音と共にあがり、フルートの流れる中を閉じる。そのフルートは又ウイリーの父親が作って売り歩いたものであり、ウイリーが母の膝に抱かれて聞いた調べでもある。それは又劇の最後で日のあたらぬ畑に種をまく姿と同様ウイリーの郷愁でもあるのだ。兄ベンもウイリーの幻想の中に現われて語る。

おやじは実に豪気な人だった。家族全員を馬車にのせ、自分で手綱をとって、オハイオ、インディアナ、ミシガンと次々と西部の州を渡り歩いたのだ。そして町々で途中で作った笛を売って生活資金を稼いだのだ。大した発明家だったな、おやじは。道具一丁で、お前達が一生かかってもできないような仕事を、一週間でやってしまうんだからな。

ベンも彼等の父親像を少しロマンチックにウイリーに語り過ぎていて嫌いはあるが、ウイリーの中には父親の姿がフルートの音と共に偶像化され、彼の「アメリカの夢」を煽ることになる。実際には彼等の父親は、しがたない流れ職人に過ぎなかったに違いない。しかしウイリーにとっては、父親像と兄のベンは重なり合って成功のシンボルとして登場することになる。彼の仕事が、そして子供達の成長がうまくいかない時には、尚更彼は父親

代りにベンに尋ねることになる。「秘訣は何ですか?」と。

ウイリーが苦しみ且つ悩む時には、きまってベンが舞台の隅に登場し、そしてこのセリフが発せられる。ベンは兄であるとはいえ、現実に存在しているかどうか明らかではない。着のみ着のまま17歳でアフリカに行き、21歳で大金持になったというのも、又ウイリーが失職して金に窮しているにもかかわらず、彼が一文の金もウイリーに都合することもないことも現実離れした設定であるからである。そう考えるとウイリーにとってベンは「アメリカの夢」と“God”の二重の役割をになったものであるといえる。既に当時において往時の如き“God”はアメリカの社会からは消滅しているからである。この点については後述することになるが、兎に角幼くして父をなくしたウイリーにとってベンは父と二重写しにされて彼自身の過去への反省とこれからの指針を求める役割をもっているといえる。

ところで父親の最大の役割は、人間の生きていく規範というか、こういうことに基いて生きていくんだ、という規範を子供に示すことであり、その規範を行わせるための厳しさを示すことにある、という考え方は、先に引用したE. フロムの論述の一部であり、又多くの教育論者の一致した見解であると思われるが、ウイリーの場合はどうであったか。

ピフは高校時代、自動車を無免許で乗りまわし、学校の部室からはボールを盗んだ。更に自宅近くの建築現場からはセメントや材木を盗んでくるが、ウイリーはむしろそれらを「いい度胸だ」とおだて、その用材を家の修理に使った。ウイリーは又人気者になること、人に好かれることが成功の秘訣だと考え、ピフを高校のフットボールの花形選手に仕立てる。彼の理想通りに事は運ぶが、しかし思わぬ落とし穴が待っていたことにウイリーは気付かない。ピフは自分が何か特権をもった人間だと思ふようになり、女生徒とのデイトの勘定も彼女等に払わせて得意になる。そのことにウイリーも得意満面である。隣のバーナードを彼等は召使のようにあつかう。ウイリーにとってすべては自分と家族のために存在している。しかしやが

てバーナードの運命は互に180度の転換をみせることになることをウイリーは予測するすべもない。

さてこのようなウイリーの世界観はどのようにして形成されたのであろうか。彼が先に述べたワグナー商会のハワード社長に次のように言うところがある。これが読者に大きな手掛りを与えている。

ええ、長年おやじがアラスカに住んでいましてねえ、冒険好きの男だったのです。あたしの一家には、独立独行の気風が強かったわけですよ。わたしも兄貴と一緒に、おやじを探しに行つて、あわよくば北に住みつくつもりでいたんです。ところが、行こうかと決めかけたとき、パーカーハウスで一人のセールスマンに逢いましてね、デイク・シングルマンという男ですが、84歳の老人で、31州に商品を売りさばっていたんです。このデイク老人は、ホテルの部屋にはいるとすぐ、いいですか、緑色のヴェルヴェットのスリッパ—ありゃ忘れられないなあ—それにはきかえて、電話を取りあげ、バイヤーを呼びだすんです。84歳で、部屋から一步も出ず、生計をたてているわけです。それを見たとき、悟りましたね、セールスマンこそ、男子一生の仕事だと。だって、そうでしょう、84歳にもなって、20も30もの違った町に出かけていき、ひよいと電話を取りあげりゃ、いろんな多くの知った人がいて、歓迎され、助けてくれる—まさに本懐でしょう。彼が死んだときのこと—あれこそ、セールスマンの死というべきでしょうな、ボストンへ行くニューヨーク=ニューヘイブン=ハートフォード鉄道の喫煙車の中で、例の緑色のスリッパをはいたまま—その死を知って、何百人のセールスマンやバイヤーが葬式にきましたっけ。その後何ヶ月も、汽車に乗ると、いつも彼の話が出て……

このデイク・シングルマンがウイリーの一生を決めることになった。シングルマン (Singleman) が一匹狼を意味することはいうまでもない。この

決定がウイリーの将来を大きく左右したことは想像に難くない。しかるべき父を欠いたウイリーには既にこのようなセールスマンは過去の遺物であることに気付かない。

過去の遺物といえ、彼にとって“God”的存在のベンの観点も過去の遺物である。ベンは初体面の甥ピフに、だしぬけに、「ここを打ってみろ」と腹を出し、尻込みするピフがウイリーにけしかけられてボクシングの腕の試されているものと思ってかかっていくと、いきなりボクシングでは反則の足払いでピフをひっくり返す。

見知らぬ人間とはフェアで勝負するんじゃないぞ。ジャングルから帰れなくなるからな。

と彼は言う。これは西部の無法者の世界である。ウイリーはベンからはこのような時代錯誤の人生訓を受けてしまう。

さすがに最早西部ではないニューヨークで既に銃ガンの通用しなくなった一匹狼の生きる道は、人気者になって「世界を征服する」ことだ、とウイリーは自然に考えるようになる。セールスマンとしての彼は、何を話すか、ではなく、如何に話すか、が問題であると語る。それに対して隣人のチャーリーは次のようにウイリーを窘める。

この世でお前が勝負するのは、お前の売る物によってなんだぞ。大富豪のJ・P・モルガンもトルコ風呂で裸になれば肉屋のおやじと変わらないし、モルガンを愛する人がいるとすれば、それは彼の肉体美のためではなく、彼のポケットをふくらませている札束のためなんだ。

しかしもう手後れである。たとえウイリーにそのことが理解できたとしても、人間はそんなに自分を変えられるものではないし、この西部の遺物ウイリーのプライドが許さない。

## (3)

チャーリー親子は、ウイリー親子とは対照的な存在である。チャーリーは息子のバーナードに対し、あのようにしろ、このようになれ、とはちっとも言わない。しかしバーナードはよく勉強するし、いつも馬鹿にされているピフやハッピーに対しやさしい心遣いをし、必要とあれば勉強を手伝っている。チャーリーは金に困ったウイリーに生活費や保険金の面倒をみてやっている。彼等には近代社会の中の一員としての自覚と認識が根付いているのである。

ピフが34才になっても定職がなく、身が定まらない大きな原因の一つにボストン事件があるとされている。数学の単位を落して卒業が危くなったピフは必死の思いでボストンに主張中の父親のもとに走る。そしてそこで目撃したのがウイリーの浮気の現場であった。ピフは夏期講習で頑張れば高校卒業も可能だったのだが、彼はそれを拒否した。ミラーは後でバーナードをしてウイリーにこのことを詰問させているけれども、これはしいて言わしめれば、ミラーの現実的でシニカルな視点を欠いで、倫理性をあまりにも強調する彼の弱点といえるであろう。もし全体的にバランスのとれた判断力がピフに備わっていたら、父親の浮気を乗り越えることはできた筈である。ピフの問題はむしろそれ以前の問題といえる。

しかしむしろ父の側からの方が、息子に浮気を知られることのショックは大きいのではなからうか。何故なら息子の問題の原因がそのことにあるのではないか、という疑念が大きく拡がることは自然だからである。現にウイリーもバーナードに「何かあったんですか」と尋ねられてひどく狼狽している。彼はその狼狽を逆に怒りに転嫁するのだが、そこには又「こんなことで父親の権威が落ちてなるものか」というウイリーの父親としての虚勢が必死の叫びをあげる。「家族のため以外に働いた日が1日としてあったらうか」と。しかし言ってみれば、このウイリーのアンヴィバレントな苦惱は普遍的な父親の苦惱でもあるのである。

ウイリーがチャーリーの事務所に又それとなく金を借りに立ち寄った時、彼は成人したバーナードに会う。彼の手許にはラケットがある。ラケットは成功のシンボルをこゝではあらわしており、ウイリーにもそのことは最先に頭をよぎる。バーナードが立派になったことに対する賛辞のあと、急に弱々しい声で今度は彼に向かって「何一だろうね、秘訣は？」とたずねる。こゝでもウイリーは、自分の息子に対する教育が間違っていたのではないか、との問を発しているのだが、それに対して、今では眼鏡をかけているバーナードは控え目な口調で、「彼は何か身につけようと努力しましたからね」と言う。そして話はピフの数学で落ちたあと、夏期講座に出なかったことに及ぶにつれ、その原因の段になると、ウイリーは怒りだしてしまう。やはりウイリーは自分の責任と思いたくはないのである。もはや彼は方向転換はできない。

父親が息子に与えるべき教育としてミラーが語っているともとれる印象的なセリフは次のものである。

バーナード　でも時には、離れてみるのもいいですよ。

ウイリー　離れる？

バーナード　そうです。

ウイリー　だが、離れられないとしたら？

バーナード　(短い間のあとで) そのときこそ、つらいでしょうね。

「離れる」とは勿論父と子の間に距離を置くことである。チャーリーとバーナードはそのことによって成功した。チャーリーは息子に指図めいたことは何も言わなかった。チャーリーは「なんの関心も持たないことで、おれは救われているんだ」とも言っている。しかし、その「救われている」という言葉の中には何か深い意味が込められてはいはしないだろうか。それは離れていることに必死につとめたことの裏返しの表現ではないだろうか。しかし、「だが、離れられないとしたら」というウイリーの言葉にはもは



や救いようのないウイリーの運命が、言葉をかえていけば悲劇が顔をのぞかせている。ウイリーはどうしてもピフから離れられないのだ。そしてその結果がピフから次のような罵声を浴びせられることになる。「それにあんたのおだてに乗っていき気になったもので、人の指図をうけることに我慢がならない、だからどこへ行っても落着かないのさ。これは誰のせいなんだ!」と。

(4)

冒頭に引用したフロムの言葉の中に「子供は父親の意志通りに行えば容易にその愛を獲得できる」という部分があった。それはたしかに正しい論理と思われるが、変貌の激しい社会にあってはその父親の意志や判断が正しい確率は、以前に比して著しく少ないといわなければならない。そしてこのことがウイリー父子の悲劇でもあるのである。しかし、それだからといって、ミラーがこの作品でウイリー父子のアンチテーゼとしたチャーリー父子を親子関係の規範ともいさゝかの危惧を感じる。何故ならば人間が可塑的な存在であることは人類学的にも証明されている明らかな事実だからである。狼に育てられた人間が四つ足で歩き、狼のような鳴声をだしていたとインドでの事例はよく引合いに出されるところである。これがもし下等動物だったら、生まれるとすぐに一人前の行動ができる反面、この狼に育てられた人間の子のような可塑性を示すことは考えられない。このように、いわゆる人間の親子の関係は「着かず、離れず」という、タイムオナードな先哲の言葉を甦らせる。これをより具体的に現代風に云えば T. A. ハドフィールドの次の文句となるであろうか。

しかし、こうは言っても若者が全く完全な自由を手にする能力があるということではない。自分の娘からいつも信頼されてきた母は、娘の青春期の諸問題について、援助の手を止める必要はない。父親を今まで自分

の友達のようにしてきた息子は、さまざまの問題について、父親の忠告を求めるものだ——しかし、彼等が求めるものは忠告のみであって、決定とか、有無を言わせぬやり方で決めつけることではないのだ。親たる者は、たとえ自分達が与えた忠告を若者が拒んだとしても驚いてはならない。私だったら、むしろただ私がそう言ったということだけで、息子が自分の判断に反してその忠告を受け入れるより、私の忠告をはねつけ、そして私の忠告が正しかったことを自分自身で見出してほしいと思う。子どもは自分自身の力で考えられるようにならなければならないからだ。<sup>2)</sup>

ピフは34歳になってようやく自分自身を知ることになる。それは彼が父に向かって投げつける次の言葉でも知ることができる。

おれは人の頭に立つような人間じゃないんだ！ あんただってそうだ。足を棒にして歩く注文とりにすぎないんだ。とどのつまりはごみ箱の中にほうり込まれるのがおちさ。おれは1時間1ドルの人間だ！ 7つの州でやってみたが、それ以上は取れない。1時間1ドル！ これでおかろう？ どだい、おほめにあづかるような物を家に持って帰れる人間じゃないんだ！ そんなことを期待するのはやめることだな！

とはいえ、ピフはウィリーを恨んでいるのではない。ウィリーには彼が自分を恨んでいると思い、これまでの息子にかけた犠牲的愛情をおもう時その苦悩は計り知れないものがあるに違いない。しかし、ピフが胸の中にくっ積していた彼にとっても苦渋に満ちた告白をした後、泣きながらウィリーにしがみつくと、それはピフが今でも自分を尊敬はしていないまでも愛している証左だと確信し、ウィリーは自殺を決行する。それはウィリーはピフが一介の西部の農場労働者で終ることを証認しないことの証明である。ピフが彼に取りすがって泣いたことは、彼の決意の程を示したものだ

と都合よく解釈せざるを得ない。自分の夢を子が果してくれることにあくまでも執着する父がここにいる。そしてここに「そう、えらくなるさ、2万ドルがついていりや」というベンが幻想の中に登場する。ウイリーはその「頭の内部」の声に励まされ、2万ドルをもとでピフの大成功を夢みて、自れを犠牲にする。実際にこの2万ドルが保険会社によって支払れたか否かについては何も語られていない。語られていないことの意味をどう解決すべきかだが、それはむしろネガティブにとらえるべきではないだろうか。ウイリーは死後までもピフから親の自立をなし得なかったというべきである。ピフが精神的な独立を果たした今、経済的にも独立させるべきではなかったであろうか。諺に言う、「財を残すは下、仕事を残すは中、そして人を残すは上」と。

## (5)

これまでウイリーとピフの関係についてのみ扱ってきたが、ここでリンダとハッピーについても一言述べておきたい。ハッピーが母親のリンダについて、彼女のやさしいウイリーへの心遣いについて次のように言うところがある。「大したものだ！ とても普通の女にできることじゃない」

たしかに、リンダの妻としてのウイリーへの献身は涙ぐましいばかりである。妻としてまさに鏡とすべき女性のようなのである。ウイリーの葬式の場面で彼女は「私は泣けないんです。どうしてか、でも泣けないんです」と言う。これはやはり夫を愛するあまり、涙を通り越した悲しみ、と解釈すべきであろうと思う。それ程彼女はウイリーのことを思っていたのである。このリンダのモデルはミラーの母親ではなかったかと想像させるのだが、それは又ミラーがユダヤ人であったことから導かれるものである。いうまでもなく結末の固いと言われているユダヤ人の家族は、このような母親によって守られてきたのであろう。しかし、リンダにたゞ夫に従うだけでなく、夫に盡くすだけでなく、夫の誤った判断をも正す賢明さがあつたとし

たら、この悲劇は悲劇に終らなかつたかも知れない。

一方ハッピーについていえば、彼はビフと異って世渡りのうまい人間である。これは当然ウイリーに過大な期待をかけられるのを免かれたからというべきであろうか。

いいとも、おれはウイリー・ローマンがむだ死にでなかつたことを、あんたをはじめ、みんなに見せてやるんだ。おやじは立派な夢をもっていた。第一級の人物になるためには、誰でも持たなきゃならん夢を。そのためにこの町で戦いぬいたのだ。だから、おれも、その同じ場所で、おやじのためにそれを戦い取ってやるのだ。

ハッピーのこの決意には真実性があるように思われる。ウイリーの「アメリカの夢」は、はからずもビフでなく、ハッピーによって実像となるかも知れない。次男なるが故に彼があまり期待をかけなかつたことが幸いとなるかも知れない。

ところでこの悲劇は何故起つたのであろうか。社会の変革にのみその原因を求めることが果してできるであろうか。そうではない。たしかに社会が変革しなかつたら、ウイリーの悲劇も起らなかつたかも知れない。しかしその社会の変革を乗り越切る人物もいたのである。それでは何故ウイリーはそれも乗り越切れなかつたのか。そういう疑問が当然湧いてくる。その疑問に一沫の解答を示唆するのが、「イノセンス」という言葉である。ウイリーの悲劇はイノセンスの悲劇といえないだろうか。それはリンダについてもいえることである。ウイリーを責めることはできない。彼のイノセンスに暖い涙を送るのみである。

(6)

ミラー劇の本質は特殊なアメリカ的経験に基づいている。彼の劇は親子

関係を中心としていて、子供がちょうど家族から離れようとしている。その結果、父は努力して造りあげた家庭の破滅に直面する。父と子の衝突は、父が家庭のまわりに築きあげた防壁を破ろうとする、より広い世界に関して起こる。父は常に背徳的であり、子供によってその背徳が暴露される。この背徳のために、父は自分の理想を破壊した罰として死を選ぶに至る。<sup>3)</sup>

これは W. J. ニューマンのミラー劇の分析だが、『セールスマンの死』にそっくりあてはまる。「特殊なアメリカ的経験」ということは、A. トフラーのいう「第二の波」の世界と言い換えることもできる。ただ、父と子の問題は、この種の社会構造の変化という単一要因にのみ起因するものではないことも事実である。父と子の愛と苦悩のテーマは永遠のテーマだということである。

『セールスマンの死』は、以上のように社会的要因と本能的運命的要因の交錯の中で起こる。この劇の中で用いられる手法は、W. フォークナーの作品のいくつかにみられる如くフラッシュバックが取り入れられ、現在の中に過去が存在し、現実と幻想とが交互に織りなされ、詩的リアリズムともいえる世界を構成する。それは舞台効果を一層ドラマチックに、且つ詩的なものにする。

『セールスマンの死』に関する考察を終えるにあたり、本文中に用いた「悲劇」という表現について多くの批評家間で問題となっているその妥当性については、ミラー自身が『ニューヨーク・タイムズ』に「悲劇と庶民」と題するエッセイを發表して、「一般的法則として悲劇感情は、一つのこと——個人の尊厳——を守るために、必要とあれば、一命をなげうつ覚悟のある人物に接するときに喚起されると思う」という定義に共感し、用いたものであることを付記しておく。

## (7)

『走れ、ウサギ』の主人公ハリー・アームストロングは、高校時代に何度も記録を更新させたことのあるバスケットの花型選手であったが、今ではある会社が発案した果物皮むき器の台所用品の宣伝販売をやっている。妻のジャニスは中古自動車販売店に生まれ、近くのデパートで働いているうちにハリーと知り合い、彼を愛したというより成りゆき上結婚してしまった。この作品の初めでは、彼女はすでに二人目の子供を妊娠している。今彼が一日の仕事を終えて帰ってきても、椅子にだらしなく坐り込み、出迎えようとしなくてテレビを見ている。そしてカクテルの飲みすぎでふらつき、いつもの如く夕食の用意もできていない。ていねいにハンガーを掛け、カチンと音がするまで閉めてみても、洋服ダンスは又開いてくる。これらの一つ一つはハリーにとって一種の恐怖感を与える。ジャニスは子供を彼の実家にあづけ、車はそこに置き放しにしてあり、ハリーは夕食もとらずに、子供を迎えに行き、車をとりに行かねばならない。暗澹とした気持で出かけるハリーにジャニスは「あんた、ついでにタバコを一箱買ってきてくれない？」と言う。それ故彼が子供を迎えにアパートを出るとき、「俺は罨にはまったんだ。それは間違いないようだ」という時、ハリーのこの作品の主題である「逃亡」への気持も理解されなくはない。

ハリーは子供が両親や妹の世話になっているのを窓越しに眺めながら忽然と逃亡の衝動に襲われ深夜の道を南へ南へと車を走らせる。しかし、メキシコ湾まで下って夜空の星を仰ごうという彼の夢もあえなく消え果てる。思わず本能的に北に向かって右にハンドルを切り、ブルウワーの町まで帰ってしまう。そして高校時代のバスケットのコーチ、トセロを呼び出し、彼をとおして街の女ルースを知る。ハリーは彼女の中にジャニスにはない清潔さを発見する。彼女は安価な文庫本でも背を折って読んだりはしない。彼女もまた彼の中に真摯なものを感じ同棲生活に入る。彼女は言う、

あんたがあきらめたりなんかしていないからだわ。馬鹿みたいに、あんたが戦っているからだわ。

ハリーにとっても又、ルースは先に述べたように新鮮な存在だった。ジャニスとの生活の中で次第に蔓延した精神の弛緩と随落は、彼には一種の危機感をよぶものだった。バスケットの試合で感ずる緊張、興奮、感情の激しい起伏を彼はルースの中に再び求めた。ルースは又身辺のわずらわしさを一切持たない女だった。結婚からくる血族関係のわずらわしさもなく、宗教的なものもなく全くのブランクネスの存在であった。ハリーが彼女に何をしているのかと訊くと、「なにも」と彼女は答えた。彼はその「無」にあこがれていたのだ。そして二人の間には“Nothing”をその本質とするセックスに埋もれた二ヶ月が続く。

しかし、ルースにとってやがてハリーは疑惑の存在となってくる。彼女は文字通り「大きなウサギ」に過ぎなかったハリーが敬神的な何かを持っていることを知ると、彼を疎んじ始める。彼女の動物的ブランクネスはそれを偽善とるのであった。妻ジャニスの出産の知らせに歌を口ずさんでジャニスのいる病院へ真夜中に走っていくハリーをみてもルースの彼に対する気持もだんだん冷めたものになっていく。一方ハリーは、ルースの奔放な生き方の前で傷いていく。その中にジャニスは生まれたばかりの子供を風呂の中で溺死させてしまう。ハリーは家族とルースの間を右往左往し、両側から非難を欲びる中を、再びあてもなく走っていく。

(8)

さてハリーを中心にここに登場する人物達は如何なる背景の下に生まれたであろうか。それを知るためには、アメリカの現在の社会状況を考察しなければならない。

A. トフラーは『第三の波』の中で次のように書いている。

核家族を、夫が働いて妻が家庭を守り、二人の子供を育てる家族だと規定して、アメリカ人の何パーセントがこのような家庭で生活しているかを調べてみると、その結果は驚くべきものである。アメリカ合衆国の人口のわずか7%にすぎない。すでに93パーセントの人々は「第二の波」の理想とした家族像からはみだしてしまっている。核家族の規定を少しゆるめて、両親共に働いている家族や、こどもの数が2人以下、あるいは2人以上の家族をふくめても、3分の2及至4分の3の人びとが核家族の定義からはみだした家庭で生活している。

まず、家族と離れてひとり住いをする人の数が急激に増加している。1970—1978年の間に、アメリカで14歳から34歳までの人で、ひとり住まいをしている人の数は150万から430万人と3倍にふえている。アメリカでは現在、世帯の5分の1が1人暮らしをしている。これは強いられてそうなったのではない。多くの人びとは考えた末にしばらくの間1人暮らしを選んだのである。<sup>4)</sup>

たとえばはっきりと意識していないとしてもハリーはまさしくここに述べられているアメリカ人の構成分子の1人である。一方ルースはそれをはっきりと決意している。ジャニスも核家族から見放されようとしている。これはまさに、トフラーの分析していたアメリカ社会の縮図である。そしてそのハリー一家と、そしてそれを敷衍する現代アメリカ社会も又ウイリーの信奉する“Singleman”の延長線上にあると言えるのではなからうか。ウイリーとハリーを比較する時、ちょうどエイハブとサンチャゴを比較する時に起るある感慨が起る。即ちそれはある種の開拓者の後裔といった感慨である。ハリーの場合彼はいわば道化的な未裔といってもいいかも知れないが、反面自己に忠実に生きるともいえるだろう。そしてその自己への忠実さは、又自己主張の強さでもあるのである。

日本でも第二次世界大戦以後アメリカのものの考え方と、第二次産業の発達による社会および家族構造の変化と共にこのような考え方が次第に浸



透してきた。そしてそれに伴い離婚もふえてきている。そして人々の意識から、「子はかすがい」という言葉は消えてゆくのではないか、という岐路に我々は立たされているかにみえる。『セールスマンの死』の中には家族のためには自己犠牲も惜しまない父があり母があったが、それから数十年を経た『走れ、ウサギ』の中には何よりも大切なものとしての子供は存在しない。開拓者魂は自己主張と自己の幸福の追求に向けられたのである。それでは何故そのような結果になったのだろうか。

(9)

工業文明の急速な発達により物質的な豊かさがもたらされるにつれて人々はその生活に同化される。親が子供に彼等の苦しかった時代を説ききかせても、子供にはそれが理解できるとしても実感することはできない。親自身が既にその社会に埋まった生活をしている以上、どうすることもできない。その環境に順応した人間達が知らず知らずのうちにつくられていくからである。いろいろの文明機器のおかげで、かつては家族内で不可欠だった「節約」「勤勉」「協力」は次第に必要でなくなり、次第に自己中心的な性格が形成されている。それは先にも述べた人間の可塑性により如何ともし難い宿命である。

アメリカの文化人類学者R.ベネディクトの有名な『菊と刀』の第12章に興味深い日米文化比較論がある。彼女がみた1940年代当時の日本と現在の日本ではいうまでもなくかなりの変化がみられるが、まだ彼女の考察した日本は生きていると思われるので引用することにする。彼女の言によると、日本人とアメリカ人の生活曲線は、その自由度において全く逆だという。

日本人のそれは「大きな底の浅いU字曲線」で、つまり幼い頃の日本人は親をはじめ周囲の人たちからの最大限の自由が許されている。何事につけても「子供だから」大目にみられる。それが成長するにつれて、親

や社会から与えられる制約が強くなる。結婚前後には、親の伝統的構成や、社会の有形無形の制裁が若者をとりまき、がんじがらめにしてしまう。そのあと日本人は義理人情のしがらみの中を生きていくのだが、それは60歳ごろになってしだいにゆるめられる。60歳を越え、赤い着物をきて還歴を迎えると、「人は幼児と同じように、恥や外聞にわづらわされない」ようになる。

アメリカ人は大ざっぱに言えばその逆である。幼児期におしりをたたく体罰をふくむきびしいしつけが与えられる。排泄訓練もきびしいし、又時間がくればベッドに押しこまれて、ベビーシッターにまかせられて親はパーティに出かけていく。若者になると「個人の自由」つまり本人の意志の尊重が強調される。配偶者の選択も本人の意志通りにされる、それ以後壮年期のアメリカ人は、自由と自発性がそのままつづく。そして年とって耄碌したり元気が衰えたり、他人の厄介者になったりすると共に、ふたたび拘束が姿を現わし始める。<sup>5)</sup>

この比較論の中に「和」を重んじてきた日本の伝統と「我」を重んじてきたアメリカの伝統を読みとることができるが、それは又アメリカと日本の空間的、自然的環境にその源を発するもののように思われる。きびしい自然を敵として闘った人々と、恵まれた自然の中に暮らす人々。広大な自然を持った人々は自分の力によって無限に自己を拡大することを強いられ、限られた自然の中に暮さねばならない人々は和を大切にしなければならなかった。しかしこゝで考えられることは、アメリカといえども既にフロンティアは消滅してしまったという事実である。最近のアメリカ人の東洋に学ぼうとする姿勢も、一時50%まで達していたアメリカの離婚率が次第に減少傾向をたどり始めたという事実も、アメリカの、そしてアメリカ人の精神構造の変化をあらわしてはいないだろうか。『走れ、ウサギ』の主人公バリーも、アップダイク後の作品『戻ってきたウサギ』ではその題名の如く家に舞いもどってくることになる。それはアップダイクの必然性と

も又先見性とも理解できる。

人間は環境に影響される存在であることは『セールスマンの死』『走れ、ウサギ』この2作品を考察する中で、しばしば言及してきた。しかし、人間は同時に環境を変えていく能力をもっていることは歴史が証明している。そしてそれが、アメリカで、その文学作品の中で、現実の社会の中で既に始まっていることも考察した。先にふれたA. トフラーは又次のようにも述べている。

「第二の波」の時代、多くの親は夢を子供に託して一生を終えた。なぜなら、たいていの場合、こどもに自分達以上の社会的、経済的生活を期待することが無理ではなかったからである。両親がすさまじいまでの精神的エネルギーをこどもに注いでこられたのは、上昇移動への期待感からであった。ところが、今日では中流階級に属する親の少なからぬ者が、苦悩と幻滅を味わっている。こどもたちが両親の時代よりもずっと苦難の多い社会環境にあって、経済的にも社会的にも、上昇どころかむしろ下降移動している。自分にできなかったことをこどもに期待できるような状況とは、すっかり程遠くなってしまったのだ。<sup>6)</sup>

この考察は又ウイリーとハリーにそっくりあてはまる。ウイリーにはとにかく夢があったが、ハリーにはその夢がない。というよりも夢をもつことのできなくなった社会に生きているということでもある。自己だけが空転している。しかし、ハリーもやがてこの「第三の波」の時代に生きる方法を見出すであろう。そのためには、開拓者の末裔として、ハリーはその極限までこなければならなかった。今ハリーは模索している。そしてその中から、責任を自覚し、自己と他人との関係を理解し、人と人との間の調和を保ち、忍耐を知る新しいハリーやジャニスが生まれてくるかも知れない。何故ならそれがこれからの社会に生きる道に外ならないからである。その点にハリーのそしてアメリカ人の未来が掛っている。(1985年1月)

(注)

- 1) エリック・フロム著，鈴木重吉訳「悪について」(紀伊国屋書店，1965) 135頁。
- 2) T. A. Hadfield; *Childhood and Adolescence* (Penguin Books, 1970) p.184.
- 3) W. J. Newman; *Twentieth Century*, CLXIV, November, 1958.
- 4) Alven. Tofler; *The Third Wave* (BANTAM BOOKS, 1980) pp. 211-212.
- 5) Ruth Benedikt; *The Chrysanthemum and the Sword* (Tuttle, 1984)  
pp. 253-254.
- 6) Alven Tofler; *The Third Wave* (BUNTAM BOOKS. 1980) p.383.